



ホシガラス （星鴉）

山梨県鳴沢村の富士山5合目の奥庭（標高2200m）で9月24日、木の枝に止まるホシガラス。黒褐色の体に白い斑点があり、斑が星のように見えることが名の由来という。展望台周辺で数回フワフワと飛んでくれた。

飛鳥または漂鳥で亜高山から高山帯の針葉樹林に暮らすカラス科。秋は好物の松の実を土や木の中に蓄える貯食行動の習性がある。「森を再生する鳥」とも言われる。全長35cm。（写真と文・堀内洋助）

一さんは三歳で修業を終え店に入った。出前もたくさんで電車を追いかけた猛りな生活。昭和二十五年、印刷業きりなで、店は地元の生活に密着していた。昭和二十五年、印刷業きりなで、店は地元の生活に密着していた。昭和二十五年、印刷業きりなで、店は地元の生活に密着していた。



現在の店内。店主の羽鳥孝一さん（左）が撮影を交へてくれた。

高い山のカラス

探鳥

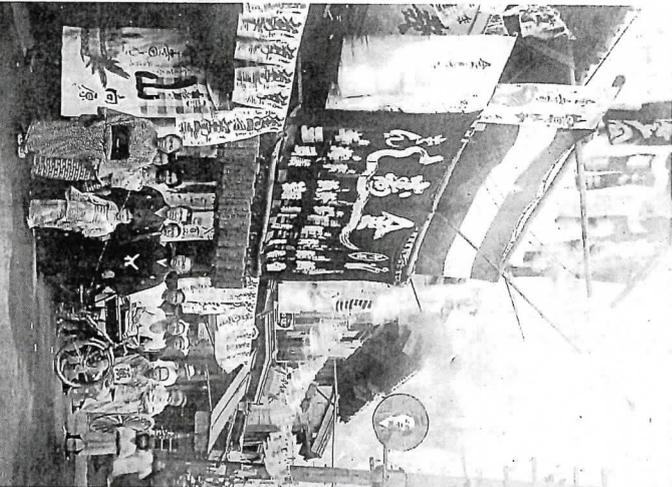
チョコカンヌ

今日は「産産（だるま）屋」。徳宗のお寺で産産大師さまをしのぶ。産産さんはインドの元王子様で中国で活躍されたお坊さん。丸い髪は産産を組むが一ツよ。



2017.10.5

Instagram@tokyokan



心意気変わらぬし

「町のすし屋」が開店

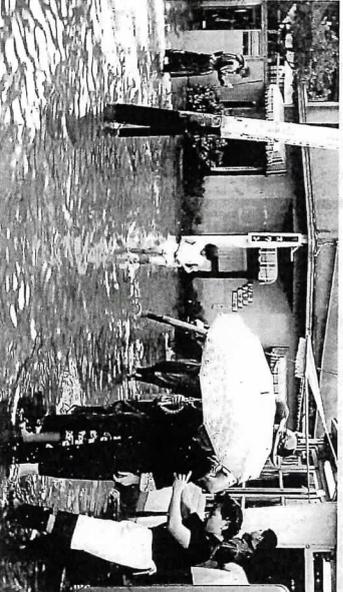
一階建ての長屋の上へ、物珍しかったらどうやらにやらか粗末集まってきた近所の子とどれ、大量のぼり旗はためち写真に納まっている。



1920年・小石川



◆金着しの店内に飾られている大正9（1920）年の開店時に撮影された写真。初代店主の羽鳥金作さん（左）と、中央が中央右大人物不明の顔写真が貼付されている谷地である小石川家のせつさん（右）（1958年ころ撮影）＝いづれも文京区で（羽鳥孝一さん提供）



◆ここではあまり見られなくなった日常生活や行事の様子、街の姿など、ご家庭にある過去の写真をお寄せください。〒100 8525（住所不要）東京新聞記者部「東京写真遺産プロジェクト」

一九〇（大正）年、東京小石川区頌・文京区小石川で、すし店「金着し」が開店したとき、一枚の紋刺が印刷業が集まり、大石川、金着し客も彼らで、多くの労働者が往還し交換なです。そんな状況で、紋刺を飾った金作さんは、

「一階建ての長屋の上へ、物珍しかったらどうやらにやらか粗末集まってきた近所の子とどれ、大量のぼり旗はためち写真に納まっている。」
孝一さん（左）が、三代目として受継ぎ継ぐ。そのほかは、小石川の歴史とも違っている。

現在の店内。店主の羽鳥孝一さん（左）が撮影を交へてくれた。

「今は地図がナナシ、辞書も減りました。工場がなくなり、パソコンも減りました。パソコンも減りました。パソコンも減りました。」

「今は地図がナナシ、辞書も減りました。工場がなくなり、パソコンも減りました。」

fax 03-35995-6920

email t-hatsuo@tokyo-np.co.jp

TOKYO